

今月のみことば 2024年2月

一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままです。
しかし、死ぬなら、豊かな実を結びます。

(ヨハネの福音書 12 章 24 節)

『塩狩峠』を観て

昨年、長野キリスト集会では映画『塩狩峠』の上映会を行いました。50年前の映画ではありますが、静かな感動が押し寄せ、涙なしには観られませんでした。映画のハイライトは、主人公が自らの命と引き換えに多くの人命を助ける場面であり、現実にあった出来事を元にしてしています。主人公のモデルとなった鉄道職員の長野政雄さんが、明治42年(1909年)2月28日、北海道を走る官営鉄道天塩線の難所塩狩峠の急な上り坂で、機関車との連結が外れて逆走・暴走し始めた最後尾の客車があわや脱線転覆して乗客多数死亡となる寸前に、自らの身体を下敷きにして客車を止め、乗客全員を救い殉職を遂げたのです。

亡くなった際に見つかった遺書(毎年書き改めて懐に入れていたもの)の中の一節から、私は衝撃と深い感銘を受けました。

「苦楽生死 ひとしく感謝」

とあったのです。これは、驚くべき言葉です。楽しいこと、嬉しいことがあったとき、感謝するのは簡単です。しかし、苦しいこと、辛いことを感謝する、というのは何と難しいことでしょうか。「生きることと死ぬこと、どちらであっても、感謝して受け入れる」と真心から言うことは、とてもできない自分がいます。しかし、この言葉が、やせ我慢や単なる理想主義、はたまた人生を諦めていたゆえでないことは、長野さんの生き様が証明しています。彼の思いを、このような高みに引き上げたのは、いったい何だったのでしょうか。



さて、一番上の聖書の言葉は、『塩狩峠』のテーマでもあります。多くの人命を救った長野さんの犠牲の死を連想させますが、一番初めに「一粒の麦」となって死んだ方がいます。その方はイエス・キリストです。キリストは十字架にはりつけにされ、むごたらしく殺されましたが、それはなぜでしょうか。私たちの罪の身代わりになるためです。「私は、死刑になるような罪を犯したことはない！」と思われるでしょうか。聖書は、創造主なる神を認めずに生きる生き方を「罪」と呼び、その生き方からあらゆる悪(実行されない、心の中だけの思いも含めて)が出てくるのだと語ります。罪のない人は一人もおらず、きよい神の基準から見れば、すべての人が失格者であり死罪にあたる者なのです。私たちは誰一人として、この罪を自己解決できません。しかし、あろうことか罪のない神の一人子イエス・キリストが、私たちの罪を負い、死んでくださいました。それだけでなく3日目に復活し、信じる者に罪の赦しと死の根本解決があることをはっきり示されたのです。

長野さんはキリストを熱心に信じる人でした。「本来自分が受けるべき処罰を一身に受けてくださった大恩人キリストこそが、自分の人生を導く方である。苦、楽、生、死、いずれも、この方の深いお考えの中で自分に与えられるものだから、感謝して、一つ一つ丁寧に、全力で取り組んでいこう」このような決意と実践のなかで、「苦楽生死ひとしく感謝」の言葉が生まれたのだと考えます。

長野さんの勇ましい生涯の原動力となったイエス・キリストをさらにお知りになり、ご自身の罪を解決される方、救い主としてお受け入れになることを、心からおすすめします。